

# 全学共通科目「書物との出会い」の 本格実施をむかえて

齊藤 和也 (経済学部教授)  
中谷 博幸 (教育学部教授)  
佐藤 慶太 (大学教育基盤センター准教授)  
西本 佳代 (大学教育基盤センター講師)

## 1. はじめに

学生が本を読まなくなると言われて久しい。だが、効果的な対策がなかなか見つからないのが実状である。しかし、どの大学でも手を拱いているわけではない。読書案内の冊子やHPを作成する試みが各地で行われているし、本学でも、学生が自分で読み進めていけるようにと、数年前から、簡単なコメントを付した教員お勧めの図書リスト（リーディングリスト<sup>1)</sup>）を作成し、HPで公開している。また、大学入門ゼミでは、初年次学生のために、情報の整理の仕方をはじめ、文章の要約方法、レポートの書き方など、基礎的なアカデミックスキルの習得のための授業を実施している。このような授業や図書リストの提供は、初年次教育には不可欠のものであり、今後も点検を重ねながら実を挙げて行く必要がある。本学では、これに加えて新たに、本を読む意義を学生に伝えるための授業を構想した。名づけて「書物との出会い」。

本学の共通教育の目標は、21世紀を生きる人間に必要な教養を身につけるために人文・社会・自然に関する幅広い知識を学ぶことにある。学生は授業を受けることを通して、現代社会が直面する諸課題を認識しその解決の方向性をつかむことが求められる。しかし、もちろん授業だけでは限界がある。それぞれの学問領域の研究の方法や知識の体系を学生が関心を持って理解できるように教員が授業を工夫する必要はあるが、学問的な知識を幅広く理解するには、やはり、学ぶ者自身が本を読まなければならない。私たちが学問の世界に入ったのは、大学の知的雰囲気の中で、今まで知らなかったものの見方や、新しい世界を示してくれる優れた書物に出会ったためであろう。この時の驚きや感激が学問研究の原点である。私たちが「書物との出会い」という授業を構想したのは、学生が学問的見方のおもしろさの一端に触れ、そこで知的世界の広がりや深さを予感し、読書による探求になじんでほしいと願ったからである。それを伝えるためにはお勧めの本を少し詳しく紹介するに如くはないと考えたのである。

## 2. 理念と導入の経緯

「書物との出会い」の計画の発端は、平成26年8月に、教育戦略室から大学教育開発セ

ンター（現大学教育基盤センター）に対してなされた、全学共通教育新カリキュラム案の検討要請にある。戦略室からの要請をうけて、大学教育開発センターでは、7つのワーキンググループ（WG）を発足させた。要請では「専門科目に偏った履修の在り方を是正する仕組みを考える」という検討事項が示されており、「学問基礎科目に関する検討WG」（以下、学問基礎科目WG）がこれにあたった（詳細は、石井ら（2015）を参照）。

学問基礎科目WGでは、まず学問基礎科目に対応する共通教育スタンダード「広範な人文・社会・自然に関する知識」が実質化されていない、という問題が確認された。具体的には、文系の学生は文系の科目、理系の学生は理系の科目の履修に偏っている状況があり、これをどう是正するか、ということが主要検討事項として定められた。

この問題を解決するためには、「広範な人文・社会・自然に関する知識」の意味について共通理解を形成する必要がある。そこでこの点について議論を行い、このような知識を育むには、次の様な「教養」理解に根差す必要があることを確認した。

- (a) 21世紀に生きる私たちにとって、自然科学や科学技術の成果を功罪含めて理解することなしには、より良く生きることはできない。
- (b) 現在は情報にあふれた社会であり、それを有効に活用することが重要である。そのためには、断片的な知ではなく、体系的な知の世界に触れ、その世界を自らの中に養っていくことが大切である。

以上の「教養」理解を踏まえて、学問基礎WGでは問題を解決するための三つの提案をした。すなわち、①学問基礎科目における理系科目、文系科目履修単位の指定（石井（2017）、本紀要、西本論文（81頁～87頁）を参照）、②文系学生のための「自然科学基礎実験」の開設（高橋ら（2016）、鶴町ら（2017）を参照）、③全学部生のための、知的読書の導きとなる授業の開設である。③が、「書物との出会い」につながる提案である。なお、②、③の授業の最終形態として想定されているのは、初年次学生の必修科目である。

「読書」をテーマとするにあたって、「現代社会を理解するための基礎的知識」や「読解のスキル」に重点を置くべき、という意見もあったが、学問基礎WGの結論はこれとは異なるものとなった。ここで想定する「読書」は、「それらの書物を通じて、断片的な知識を獲得するのではなく、ディシプリンとしての学問が有する体系的知に自ら向き合うこと」である。また第一の目的は「それらの体系的な知を知識として獲得すること」ではなく、「未知の体系的知に接した時の驚嘆、そのような体系的地の広がりや深さへの予感をもつこと」にある。単に情報を与えるのではなく、学生が知的読書を習慣とし、自ら学ぶ力を養うためには、こういった経験を初年次にさせておくことが重要である、と考えたわけである（石井ら（2015）を参照）。なお、この授業を理系学生限定とする意見もあったが、上記のような読書の促しはすべての香川大学生にとって重要であることから、全学部生向けの授業として提案することとなった。教育戦略室に対して、学問基礎WGは平成27年3月に、

上記の内容を含む答申を提出した。その後「書物との出会い」を含め、上記の三つの提案は、カリキュラム改革においてすべて実質化されることになる。

### 3. 実施内容

「書物との出会い」は平成 28 年度からスタートする。「学問基礎科目」の中に、「学問への扉」というサブカテゴリーを設け、その中で「書物との出会い」と「自然科学基礎実験」が開講されることとなった。

#### 3-1. 運営体制

「書物との出会い」の運営を支える委員会（担当者の選出や授業の基本的なデザインの決定を行う組織）は、調査研究部の下に置かれている「書物との出会い企画実施委員会」である。通常、全学共通教育の各科目群に対応する委員会は、共通教育部の下に置かれているが、「書物との出会い」に関わる委員会は、調査研究部で企画された新たな試みであるため、まずは調査研究部の下に設置された。メンバーは、全学共通教育コーディネーターと、先述した答申の作成に関わった教員である。本格実施の段階に入ったため、平成 30 年度からは、「書物との出会い」と「自然科学基礎実験」の運営組織として、共通教育部の下に「学問の扉実施部会」が設置されることが決まった。上記の企画実施委員会では、担当者の代表がメンバーとして入るという規程がなく、今のところ全学共通教育コーディネーターの中に担当者がいるので現場との連携がとれる、という状態であり、体制として不安定であった。学問の扉実施部会では、規程に基づいて担当者の代表がメンバーになるので、この問題は解消される見通しである。

#### 3-2. 授業のテーマと担当者

「書物との出会い」として、平成 28 年度はそれぞれ（イ）「近代ヨーロッパと現代」、（ロ）「男と女」というテーマで 2 クラス、平成 29 年度は、（イ）「近代ヨーロッパと現代」、（ロ）「男と女」、（ハ）「映像と書物」というテーマで 3 クラス開設した。なお「映像と書物」は、理系学生も近づきやすいテーマを、という要望から開設したものである。

28 年度、29 年度は、ひとつのテーマ設定をして、そのテーマに対するいくつかの分野からのアプローチや分析を見せるようにしているが、他の授業形態を排除するものではない。たとえば、テーマを設定しないこともありうる。

授業担当者は、大学教育基盤センターの教員のほか、当該テーマに造詣の深い教員に直接依頼する、という形で集めている。通常の学問基礎科目のように、各科目領域から何名、という形での出動ではないため、安定的な継続のためには今後何らかの選出ルールの確定が必要だろう。

なお平成 30 年度より、香川大学の新任教員プログラム（新任教員が 2 年間で 40 時間の

研修を受けることが求められる)において、「書物との出会い」の担当が研修に換算されることになっており、この点での担当者増加が期待される。

### 3-3. 授業のコンセプト

授業コンセプトとして、以下の3点を担当者間で共有している。

- ①授業開設の背景：高校までは暗記型の授業で学生は、インターネットなどで多くの情報に接してはいるが、そのほとんどが断片的である。大学では、それらの情報を整理する視点が必要であり、問題点を見つけだし、解決策を探求する力が必要である。そういった力の育成の第一歩として、書物がもたらす「今まで思いもよらなかった視点や、問題へのアプローチ」に触れてもらうことが大切である。
- ②授業の目的：そこで、この授業では、各教員が、それぞれの視点から人文・社会科学に関わる書物の読み方を提示することにより、新入生に、学問することの原点である驚きや感激を味わい、学問することのおもしろさに触れ、知ることの喜びを経験してもらうことを目的とする。
- ③授業内容：具体的な授業内容としては、関連する書物を読み、課題のレポートを書くことによって、読書による探求に馴染んでもらう。主に初年次生が対象であるため、専門的知識を前提にしないで理解できる内容とする。また、各ディシプリンの分析視角・分析方法を効果的に伝えることに努める（複数のディシプリンの分析視角・方法の存在を意識させる）。

### 3-4. 授業の事前準備

この授業の特徴のひとつは、事前に担当者による研究会を開催し、授業案について質問したり批評を加えたりする、という点にある。この発表会と並行し、シラバス案および課題図書リストづくりを進めた。各授業の取りまとめ役として、授業コーディネーターを1名置いている。担当教員は、1人につき3作品の課題図書を紹介することになっている。この課題図書を1作品につき6冊、大学図書館に配架されるように手配し、学生が課題に取り組みやすい環境づくりを心掛けた（大学図書館でも、特別に配架場所を設定していただいた）。また、課題図書の書誌情報や教員のコメントを掲載した「リーディングリスト」を作成し、大学教育基盤センターのホームページ上で公開もしている。

### 3-5. 授業の概要

授業の進め方は、3つのクラスでおおむね共通であり、以下のような組み立てになっている（平成28年度の場合）。第1週の授業コーディネーターによるオリエンテーションのあと、1人の教員が2回ずつ授業を担当する。7回の授業が終わった時点で、3人の担当教員による授業の振り返り、学生からの質問への回答、教員相互のディスカッションを行う（第8週）。後半の第9週以降も同様の流れで授業を進めた。授業の基本は、適宜グループ

討論の時間を交えながら、書物の紹介を行うという形態である。なお平成 29 年度は、学問基礎科目で疑似クォーター制が敷かれているため、全 16 回の授業となっているが、基本的な組み立ては平成 28 年度と変わらない。

上記のように、授業の中で 2 回、教員相互のディスカッションが行われるが、このディスカッションを活性化するために、担当者には、ディスカッションで同席する教員の授業の参観を奨励している。この参観は教員の間で非常に評判がよく、授業方法や問題へのアプローチの仕方など、いろいろと学ぶところが多いという声がよく聞かれる。また授業終了後に、担当教員と参観教員との間で意見交換が行われる場合もある。

授業に関して学生に課されるのは、前半終了時のレポート、後半終了時のレポート、課題図書レポートの 3 つである。そのほか毎回の授業ごとに感想等を書いてもらうミニレポートがある。平成 28 年度の場合、前半、後半レポートでは、「授業を通じて学んだ学問的アプローチ」について記述することを課し、課題図書レポートでは、教員が紹介した書物から 1 冊を選択し、紹介教員が設定した課題にこたえることを求めた。最後の課題の提出期限は、9 月末とし、夏休み中にじっくり課題に取り組んでもらうようにした。この授業は前期開講だが、上記のような仕組みをとっているため、成績評価結果は後期の授業と同じ時期に公開される。成績は、これらの 4 種類のレポートを総合的に評価して出されている。原則として各教員は、自分が担当した授業に関連する内容のレポートの評価を行うこととしている。

授業との関連で、学生対象の講演会（アドバンスト・セミナー）を開催したことも付け加えておこう。平成 28 年度は、「本をデザインしながら考えてきたこと」というタイトルで、グラフィック・デザイナーの白沢正氏に、平成 29 年度は、「神原甚造コレクションの歴史的な位置」というタイトルで香川大学教育学部准教授守田逸人教員（授業も担当していたただいている）に講演をしていただいた。授業ではカバーできない本の魅力を伝える機会となり、参加した学生からも好評を得た。

### 3 - 6. 授業終了後の取り組み

授業が終了した後、担当者を招集して当該年度の振り返りを行っている。ここでは、自分の担当した授業や、他の教員の授業の内容についての意見交換や、ディスカッションや課題設定についての意見聴取が行われる。ここで話し合われた内容は、上述の「書物との出会い企画実施委員会」で報告され、次年度の授業改善に活かされる。

付け加えておくと、これまでに述べてきた授業のすべてのプロセスにおいて、各授業に 1 人置かれているコーディネーターの役割が非常に大きい。事前研究会に関する調整、課題図書の図書館配架、授業開始後の学生のレポートの取りまとめ、ディスカッションのコーディネート、評価の取りまとめなどがコーディネーターの仕事となる。この授業を今後拡大していくにあたり、もちろん担当者の増員も必要であるが、授業コーディネーターを担える人材をどれだけ確保できるかが、ひとつの鍵になるだろう。

## 4. 受講生を対象としたアンケート調査の結果

### 4-1. 調査の方法

書物との出会いを受講した学生の意識を確認するため、①授業の初回（2017年4月）、②授業の最終回（2017年7月）、③課題レポート提出時（2017年9月）、の3回に分けてアンケート調査を実施した。①②については授業中に配布回収し、③については授業の最終回で配布し、課題図書レポートと一緒に修学支援グループ事務室横のレポートボックスへ提出するように指示を出した。①②については無記名、③については成績評価に影響しないことを説明した上で、名前を記入してもらった。これは、昨年度の調査時、①②と比べ③の回収率が著しく低かったためである。なお、「近代ヨーロッパと現代」「男と女」「映像と書物」のいずれのクラスにおいても同様に調査を実施している。①②の回収率は授業出席者を母数とした場合100.0%、③の回収率は62.6%<sup>2)</sup>だった。

### 4-2. 調査対象者の属性

調査結果を確認する前に、調査対象者の属性について確認しておこう。表1は調査対象者の学年、表2は調査対象者の所属学部を示したものである。学年については1年生が約9割、所属学部については調査の回によって多少ばらつきがあるものの、教育学部2～3割、法学部1割、経済学部1割、医学部1～2割、工学部2～3割、農学部1割～2割となっている。表として掲載していないが、性別についてはすべての回において男性と女性がほぼ半数ずつとなっていた。また、受講した授業については、【初回】「近代ヨーロッパと現代」32名「男と女」75名「映像と書物」73名、【最終回】「近代ヨーロッパと現代」20名「男と女」61名「映像と書物」45名、【課題レポート提出時】「近代ヨーロッパと現代」9名、「男と女」34名「映像と書物」34名となっていた。

表1 調査対象者の学年

		1年生	2年生	3年生	4年生	合計
初回	実数	160	10	6	4	180
	%	88.9	5.6	3.3	2.2	100.0
最終回	実数	123	5	2	1	131
	%	93.9	3.8	1.5	0.8	100.0
課題レポート提出時	実数	77	2	3	0	82
	%	93.9	2.4	3.7	0.0	100.0

表2 調査対象者の所属学部

		教育学部	法学部	経済学部	医学部	工学部	農学部	合計
初回	実数	44	26	14	29	47	17	180
	%	24.4	14.4	7.8	16.1	26.1	9.4	100.0
最終回	実数	36	13	12	21	34	15	131
	%	27.5	9.9	9.2	16.0	26.0	11.5	100.0
課題レポート 提出時	実数	23	10	9	9	18	13	82
	%	28.0	12.2	11.0	11.0	22.0	15.9	100.0

#### 4-3. 到達目標の達成度

本節では、受講生を対象としたアンケート調査の結果から、到達目標の達成、読書時間と読書冊数の変化、授業の構成要素に関する意見、必修化についての意見、クォーター化についての意見、課題レポートの感想、授業全体の感想、の7点を報告する。まず、書物との出会いで設定されている到達目標を受講生がどの程度達成できたと考えているのかみてみたい。書物との出会いの到達目標として、「①改めて書物と出会い、その経験について述べることができる。②書物の読解を通じて、いくつかのものの見方、探求の仕方を学び、実際にそれらを活用できるようになる。③知的読書を習慣とするための第一歩として、課題図書を読み、それについて自分の考えをまとめることができる。」の3点が掲げられている。この中から、授業の最終回で回答可能な内容を選択し、「すぐれた書物に出会うことができた」「書物を読んで、驚いたり感激したりした」「今まで知らなかった学問的なものの見方や、アプローチの仕方を理解した」「知的読書を習慣とするきっかけをつかんだ」という4つの項目を作成した。その項目について、「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4つの選択肢を用意し、該当するものを選んでもらった(表3)。回答結

表3 到達目標の達成(最終回アンケートにて実施)

		とてもあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	未回答・複数回答	合計
すぐれた書物に出会うことができた	実数	32	77	20	2	0	131
	%	24.4	58.8	15.3	1.5	0.0	100.0
書物を読んで、 驚いたり感激したりした	実数	44	71	16	0	0	131
	%	33.6	54.2	12.2	0.0	0.0	100.0
今まで知らなかった学問的なものの 見方や、アプローチの仕方を理解した	実数	84	40	7	0	0	131
	%	64.1	30.5	5.3	0.0	0.0	100.0
知的読書を習慣とする きっかけをつかんだ	実数	20	66	41	4	0	131
	%	15.3	50.4	31.3	3.1	0.0	100.0
後輩にこの授業を進めたいと思った	実数	36	65	25	5	0	131
	%	27.5	49.6	19.1	3.8	0.0	100.0

果をみると、「すぐれた書物に出会うことができた」「書物を読んで、驚いたり感激したりした」については8割以上の学生が肯定的な回答（「とてもあてはまる」もしくは「少しあてはまる」と回答した者を指す。以下、同様に表記。）をしていることがわかる。また、「今まで知らなかった学問的なものの見方や、アプローチの仕方を理解した」については9割以上の学生が肯定的な回答をしており、学問の導入として重要な役割を担っていることがうかがえる。一方、これらと比べると肯定的な回答の割合が低くなっているのが、「知的読書を習慣とするきっかけをつかんだ」（65.7%）である。では、本授業が開講されていた期間中、学生の読書習慣は具体的にどのような状態にあったのか。本調査では、受講生の読書時間と読書冊数を3回の調査で継続して聞いている。続けて、その点について確認してみよう。

#### 4-4. 読書時間と読書冊数の変化

表4は受講生の一日の平均読書時間と、表5は受講生の一カ月の平均読書冊数の変化をそれぞれ示したものである。まず、表4についてみると、【初回】【最終回】【課題レポート提出時】の3時点と比較して、大きな変化がないと解釈できる。【初回】は「0分」4割、「30分未満」4割、【最終回】も「0分」4割、「30分未満」4割と変化ない。【課題レポート提出時】は「0分」2割、「30分未満」6割と、値が改善しているようにみえるのだが、回収率の低さ（62.6%）に鑑みると、本授業に親和性のある学生が回答する傾向にあったため、このような結果が得られたと解釈できる。

表4 読書時間の変化

		0分	30分未満	30～60分	60分以上	未回答・複数回答	合計
初回	実数	66	75	31	8	0	180
	%	36.7	41.7	17.2	4.4	0.0	100.0
最終回	実数	49	54	23	3	2	131
	%	37.4	41.2	17.6	2.3	1.5	100.0
課題レポート提出時	実数	16	47	16	2	1	82
	%	19.5	57.3	19.5	2.4	1.2	100.0

表5も表4と同様の解釈が可能である。すなわち、【初回】は「0冊」2割、「1冊」3割、【最終回】も「0冊」2割、「1冊」3割と変化なかったが、【課題レポート提出時】には「0冊」1割、「1冊」2割と値が改善したようにみえる。しかし、これも回答する学生がより本授業に親和性のある者になった影響とみる方が妥当だろう。他方、気になるのが、【初回】に10名いた一カ月に7冊以上本を読む学生の存在である。一カ月に7冊以上本を読む学生は【初回】には10名いるが、【最終回】には3名、【課題図書レポート時】には1名と減少している。受験を終えたばかりの高校3年生の春休みにはゆっくりと本を読む時間があつたものの、大学入学後は読書の時間を確保できない。そうした“忙しい”大学生活の結果を



示しているとも考えられる。

表 5 読書冊数の変化

		0冊	1冊	2冊	3冊	4冊	5冊	6冊	7冊以上	未回答・ 複数回答	合計
初回	実数	44	48	39	21	13	5	0	10	0	180
	%	24.4	26.7	21.7	11.7	7.2	2.8	0.0	5.6	0.0	100.0
最終回	実数	24	35	37	22	5	5	0	3	0	131
	%	18.3	26.7	28.2	16.8	3.8	3.8	0.0	2.3	0.0	100.0
課題レポート 提出時	実数	7	19	28	18	5	3	0	1	1	82
	%	8.5	23.2	34.1	22.0	6.1	3.7	0.0	1.2	1.2	100.0

#### 4-5. 授業の構成要素に関する意見（最終回アンケートにて実施）

続く表 6 は、「授業外学習の課題の量」「授業の難易度」「担当教員の数」「全 16 回の授業のつながり」「受講者の人数」という 5 つの授業の構成要素について、適切か否かを聞いた結果を示したものである。各項目について 9 割以上の学生が「適切だった」と評価しており、受講生にとって適切な形で本授業が構成されていると言えそうだ。

実は、同項目を用いた平成 28 年度のアンケート調査では、大きく異なる結果が得られている。具体的には、「近代ヨーロッパと現代」の受講者の中で、「適切でなかった」と回答した者の割合は、「授業の難易度」9 割、「全 15 回の授業のつながり」<sup>3)</sup> 4 割となっていた。理由としては、それぞれ「難しすぎた」、「あったのかもしれないが見えにくい」といったものが挙げられていた。そのため、表 6 の値は、平成 28 年度と比べて、平成 29 年度の授業内容がより受講生に適したものに改善されたことを示しているとも言える。オムニバス形式の本授業では、「授業の難易度」と「全 16 回の授業のつながり」についての調整は難しくもある。その点を忘れずに、引き続き次年度以降の授業計画を立てる必要があるだろう。

表 6 授業の構成要素に関する意見（最終回アンケートにて実施）

		適切だった	適切で なかった	未回答・ 複数回答	合計
授業外学習の課題の量	実数	122	9	0	131
	%	93.1	6.9	0.0	100.0
授業の難易度	実数	122	9	0	131
	%	93.1	6.9	0.0	100.0
担当教員の数	実数	125	6	0	131
	%	95.4	4.6	0.0	100.0
全16回の授業のつながり	実数	123	8	0	131
	%	93.9	6.1	0.0	100.0
受講者の人数	実数	127	4	0	131
	%	96.9	3.1	0.0	100.0

## 4-6. 必修化についての意見（最終回アンケートにて実施）

「2. 理念と導入の経緯」でも述べた通り、本授業は必修化を想定して計画されたという経緯をもつ。そのため、アンケート調査では、受講生に必修化についての意見も聞いている（表7）。回答結果をみると、「賛成」13.0%、「どちらかといえば賛成」43.5%となっており、合計すると賛成意見は56.5%となる。一方、反対意見は42.8%であり、若干ではあるが、賛成意見が反対意見を上回っていることが確認できる。

賛成、反対それぞれの理由をみると、賛成については、『安価に』『専門的な知識を』『大量に』仕入れられるから。」「レポートをやるために仕方なく読書するという人が多いため、この授業で読書の楽しさを理解すればいいと思うから。」「受講することで悪い点を考えられないから。」といった理由が挙げられた。一方、反対については、「書物から学びたい人もいれば、そうでない人もいると思うので選択で十分だと思う。」「読書は大切だが専門科目で読む必要もでてくるだろうし、無理に指定された本を読んでも読書のきっかけにはならないと思う。」「書物を読むことは強制されるべきものではない。そんなことしたところで無駄。よって授業も無駄におわる。」といった理由が挙げられた。

表7 必修化についての意見

	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	未回答・複数回答	合計
実数	17	57	44	12	1	131
%	13.0	43.5	33.6	9.2	0.8	100.0

4-7. クォーター化についての意見（平成28年度アンケートにて実施<sup>4)</sup>）

本授業の必修化が検討されるにあたり、開講形態として想定されているのがクォーター型科目である。全8回1単位のクォーター型科目であれば、一クラスに100名超が受講するとして、13クラス開講すると1年生全員の履修が可能となる。そのため、アンケート調査では、本授業をクォーター化することについての意見も聞いている。表8は、前半8回が終了した時点で、今回で授業が終了すればどのように感じるか聞いた結果を示したものである。この結果からは、「ちょうどよい」61.0%、「物足りない」31.2%、となっており、おおむね、8回での授業完結に好意的な意見であることがわかる。

表8 クォーター化についての意見

	ちょうどよい	物足りない	すでに多すぎる授業内容だった	合計
実数	47	24	6	77
%	61.0	31.2	7.8	100.0

#### 4-8. 課題レポートの感想（課題レポート提出時アンケートにて実施）

また、自由記述の形式で、課題図書レポートと授業全体の感想も聞いている。最後にそれらについてもいくつか紹介したい。

- ・ 普段考えることのないような話を読んだレポートだったためそもそも確立してすらない自分の意見をまとめるのが大変だった。
- ・ 題が難しく、軽い気持ちでは取り組めないものでした。真剣に取り組んでいると、今まで考えてもないような考えが思いつくこともあり、楽しくもありました。
- ・ 今まで何かに対しての考察を2000字も書く、という経験がほとんどなかったので、少し苦戦したが、書き終えてみると本一冊に対して、2000字というのはあまりにも少なく、もっと書きたいと思った。
- ・ 授業の中で学んだことを実際に本を読んでさらに深く理解することができたので良かったです。本を読み、その解釈を受け、吸収し、自分の意見、考えを出すことは難しかったです。本を読んだことで自分自身の考え方の視野が広がり、興味関心の幅を広げることができたと思います。

課題レポートの感想として多く寄せられたのは、「大変だけど楽しかった、いい機会になった」というものである。1年生の前期の時点で、学問的な書物をしっかり読むという経験や考えたことをレポートにまとめるという経験をしている者は少ない。そうした状況の受講生たちにとって、本授業の課題が新鮮にうつっている様子がうかがえる。また、2000字という課題図書レポートの字数については、1年生前期の受講生にとっては少し多目の設定ではあるが、特に問題なくこなしているようである。

#### 4-9. 授業全体の感想（課題レポート提出時アンケートにて実施）

一方、授業全体の感想については、幅広い意見が寄せられた。3つの授業で扱うテーマが異なるため、その点に特化した意見を除いていくつか紹介したい。

- ・ 大学に入って間もなかったし、どのような授業するのか不安だったけれど、詳しい解説、班員との話し合い、各自でのレポート作成、と、とても良い形式だったし、進むスピードも適切だった。深く学ぶことも大切であるけど、この授業のように色んな分野を少しずつ学ぶ、というのも視野が広がり、全学共通科目としても適切なものと思った。
- ・ 読書は好きだけれど、新書のような学問的な本を読むのはあまり好きではなかったが、この授業を受講し、こんなにおもしろいことが書いてあるんだと思った。これからも新書などを読んで知識を深めていきたい。
- ・ 課題図書を読み、レポートを書くというのが非常に難しかった。なぜなら、今まで自分が学問的な本に触れていなかったからだ。レポート以前に、課題図書の内容を理解する

のにかなり苦労した。しかしその反面、授業での講義は非常に分かりやすく、おもしろくて、とても興味を引かれた

- ・あまり読書の習慣がなく本に関する知識も浅かったので受講しました。授業内容や関連して紹介される書籍は興味深いものが多かったです。まだまだ本を定期的に読んだりする習慣がついたわけではありませんが、レポートといった課題を通じて本を読んで考えるという経験ができてよかったと思います。
- ・大学での“学問”がどういうものなのか、少し分かったような気がする。また、多くの書物と出会う（読む）ことで新しい世界が広がり、理解が深まることをレポートを作成しながら実感することができた。
- ・書物との出会いという授業名でしたが、書物よりも考え方を多く学べた点が良かった。今後の糧となる非常に有り難い内容だった。
- ・知的読書の面白さを理解する、貴重な体験ができた。今までこのように本を深く考えて読むことが無かったため、新しい勉強法を知ることができたと考えている。また、先生方の読書に対する考えを知ることができたのもこれからの自身の読書の参考になると思う。紹介された本の数も多く、まさに「書物との出会い」だと思う。様々な先生の授業を受けることができて、面白かったです。

授業全体の感想としては、「書物の面白さがわかった」「様々なものの見方が理解できた」というものが多かった。オムニバス形式で6名の教員が解説する、という本授業の形式も受講生には魅力的にうつったようだ。他方、課題として挙げられるのは、読書習慣をつけるということである。本授業だけではそこまで到達できていないことが、受講生の感想からもうかがえる。もちろん、ひとつの授業でできることには限界があり、カリキュラム全体を通して継続的に検討すべき課題だと言えるだろう。

## 5. おわりに

最後に、授業後の反省会や企画実施委員会で担当教員によって指摘された問題点をまとめておこう。5項目に分けて述べていく。

①担当教員の確保：まず、授業担当者を選出するルールが明確化されていないという問題がある。目下、企画実施委員会のメンバーの人脈を使って担当者を探しているという状況である。全学共通科目では、各科目領域の負担量が決められているため、このようなやり方を継続し属人的負担が増えると、既存のルールとの間で不整合が生じる可能性がある。またルールが明確化されていないと、担当者を随時増員する見通しも立てにくい。担当者の増員に関しては、学部における厳格な授業負担上限が障害となっていることも指摘されている。クラス数を増やすためには、負担上限に関する例外措置などを講じていく必要もあるだろう。

②時間割：6人のオムニバス授業ということで、担当者全員の都合がつく曜日・校時を見出す難しさがある。「書物との出会い」の時間割を先行的に決定するということが、問題はある程度解消されるが、学部で開講される授業は、担当者の一存で時間割を決められないこともあり、全面的な解決にはつながらない。この問題を解消するための方策として、「書物との出会い」を1単位（8回）、担当者3人の授業に変更するという案もある。時間割の問題は解消されるだろうが、授業数が増えるため、各授業のコーディネーターをどのように確保するかという問題が出てくる。

③授業コンセプト：いうまでもなく「書物との出会い」の狙いは学生に本を読ませることである。しかしもともと読書に親しんでいない学生に、古典を読ませる授業はハードルが高い。「近代ヨーロッパと現代」の受講者が少ない原因のひとつはここにあると考えられる。しかし、そういった学生に歩み寄って「映像と書物」のようなテーマを設定すると、今度は書物が陰に隠れてしまって、何を目的とした授業なのかが見えにくくなってしまう。これは学生だけではなく、担当教員にとっても言えることである。まずは「本を読ませる」という基本コンセプトを担当教員にしっかり理解してもらうために、たとえば本稿の「2. 理念と導入の経緯」で述べた内容を、新規担当教員に読んでもらう、といった方策が考えられる。

また、この授業の到達目標のひとつは「知的読書を習慣とする」ということにある。しかしアンケート結果が示すように、授業期間中に読書量の増加を期待することは難しいようである。「知的読書の習慣化」という到達目標が、どの段階で達成されたとみなすのか、またこの到達目標にどこまでこだわるか。これらは今後検討すべき問題である。

④授業デザイン：アンケート結果をみる限り、授業の適正規模や進め方については、大きな問題はないようだ。しかしグループワークをどの程度活用すべきか、といった点については議論が必要である。それ以上に問題なのは、授業中に2回設けられているディスカッションの時間をどのように活用するか、ということである。これまでは、学生の質問をベースに、教員間でディスカッションをするという形態が一般的である。しかし、担当者に変更がない状況でこれを数年繰り返すと、内容がほぼ同じものになってしまう可能性がある（学生からの質問には毎年同様のものがある）。ある教員が話した内容に対して、他の教員が「こういった別の切り口もあるのでは？」という質問をして、扱われていた問題を別の角度からとらえる視点を学生に提示する、ということが成立すれば理想的だが、この場合でも、学生がついてこれられない議論になってはいけない。ディスカッションの組み立てに関してはさらなる工夫が求められる。

⑤学生への書籍の提供：現在、授業で紹介される書籍は、1つの授業につき18作品（6人の担当者が3作品を紹介）である。各作品6冊ずつ大学図書館に配架してもらっているが、レポート課題が出される時期に、「本が図書館にない」と訴えてくる学生もいた。比較的安価なものもあるため、できれば学生に購入してほしいという思いも教員たちにはあるが、買うことを前提にして紹介するのどこか気が引ける。対策としては、大学図書館の電子

書籍サービスを活用する、といったことが考えられるが、すべての書籍で可能なサービスではない。書籍数を増やすのか、購入してもらう方針を明確化するのか、議論が必要である。

すでに述べたように、「書物との出会い」は必修化を目指してスタートした科目である。必修化となると、1300人程度の初年次学生を収容するキャパシティが必要になる。仮に1単位化して、1クラスで100人収容したとしても、13クラスが必要だ。現在、2単位型で3クラス（1単位型に換算すると6クラス）開講しているので、倍以上の出動が必要になる。この前提のもとで上記の諸問題を見ると、①、②、③、⑤は、さらに重さを増すと言わねばならない。さらに学生のモチベーションの低下、教室の確保といった、必修化ならではの問題も発生してくる。必修化への道はなかなか厳しい。

とはいえ、この取り組みを広げていくことには間違いなく意義がある。本稿筆者である斉藤および佐藤は、平成29年6月17日～18日に開催された中国・四国地区大学教育研究会の人文社会科学分科会で、「書物との出会い」についての報告を行った。その際参加者からは、非常に素晴らしい企画である、自分の大学でも設けたい、今後継続、拡張してほしい、という意見をいただいた。拡充への道はたやすくはないが、香川大学全学共通教育の特徴ある取り組みとして大事に育てていきたい。

諸々の問題を乗り越えるための第一歩として「書物との出会い」のプレゼンスを高めることが重要だろう。学内、学外へのアピールの方策として、本授業の内容をまとめた冊子を刊行してはどうか、という意見がある。これは「書物との出会い」の受講者には、授業の全体像を見渡すためのツールになるし、受講していない学生にとっては、教員お勧めの書物について、踏み込んだ理解を得るための手がかりになる。学外に対しては、香川大学の特徴的な取り組みを知ってもらう機会となるだろう。授業の質を高めることももちろん重要だが、冊子の作成などを通じて「書物との出会い」のプレゼンスを高めることも、今後検討していく必要がある。

## 注

- 1) リーディングリストは以下の URL において公開されている。  
<http://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/readinglist.html>
- 2) ③の質問紙は、授業の最終回で配布した。そのため、最終回の授業参加者131名に占める③の回答者82名の割合を、回収率62.6%として示した。
- 3) 平成29年度、学問基礎科目は疑似クォーター型科目として開講することが求められた。そのため、平成28年度のアンケートでは「全15回の授業のつながり」、平成29年度のアンケートでは「全16回の授業のつながり」を聞いている。
- 4) 「表8. クォーター化についての意見」のみ平成28年度に実施した、前半時終了アンケートの結果を用いている。このアンケートは、前半が終了する第8回に実施され、「近代ヨーロッパと現代」13名「男と女」64名の回答が得られた。平成29年度については、前半終了時アンケートを実施していないため、本稿では、平成28年度のデータ

を参照している。

## 参考文献

- 石井知彦・高橋尚志・中谷博幸・水野康一・佐藤慶太・葛城浩一（2015）「全学共通教育新カリキュラムの検証—教育戦略室からの諮問に対する答申」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第12号、1-60頁。
- 石井知彦（2017）「全学共通教育「学問基礎科目」における「文系」・「理系」の履修について」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第14号、29-40頁。
- 高橋尚志・鶴町徳昭・岡田宏基・中村丈洋（2016）「文系向け自然科学基礎実験の起ち上げ」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第13号、105-110頁。
- 鶴町徳昭・高橋尚志・寺尾徹・岡田宏基・横平政直・山田佳裕・石井知彦・丸浩一・中村丈洋（2017）「文系向け「自然科学基礎実験」の本格実施」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第14号、131-139頁。